

ミネアポリス会議

1888 年に行われた SDA (Seventh-day Adventist) 教会のミネアポリス会議は、教会史の中でも特に重要で、「信仰による義」をめぐる神学的・霊的転換点とされている。

▶基本情報

名 称：第 27 回セブンスデー・アドベンチスト教会世界総会

開催年：1888 年 10 月 11～14 日

開催地：アメリカ合衆国ミネソタ州ミネアポリス

内 容：年次総会 (General Conference Session)

礼 拝：ワゴナー「信仰による義」

▶なぜ重要な会議となったのか

1. 教会内の霊的・神学的状況

当時の SDA 教会は、安息日、律法（特に十戒）、預言（ダニエル書・黙示録）を強調するあまり、次第に「行い中心」「律法中心」の信仰に傾いていた。

2. 争点、問題意識

律法は救いの条件なのか？キリストの義とは何か？信仰と行いの関係は？これらが教会内で十分に整理されていなかった。

▶最大の争点：ガラテヤ書の「律法とはいったい何か。」

→ガラテヤの信徒への手紙 3：19

では、**律法**とはいったい何か。律法は、約束を与えられたあの子孫が来られるときまで、違犯を明らかにするために付け加えられたもので、天使たちを通し、仲介者の手を経て制定されたものです。

→ガラテヤの信徒への手紙 3：24、25

こうして律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となったのです。わたしたちが信仰によって義とされるためです。25 しかし、信仰が現れたので、もはや、わたしたちはこのような養育係の下にはいません（＝律法、十戒が廃止されたのではなく、信仰により律法に支配される立場から解放された）。

▶反駁（論戦）：①②Vs③

①A.T.ジョーンズ (Alonzo Trevier Jones) → **律法＝道徳律** (神の永遠の意志、信仰生活の指針、中心は十戒)
主にガラテヤ書の律法について発表：①律法は罪を示すが人を救うものではなく、②キリストの義だけが人を救う、③律法は、信仰へ導く教師であると主張。しかし律法そのものが無効になるわけではなく、救われた者の心に、律法は愛として生きると主張した。

②E.J.ワゴナー (Ellet.J.Waggoner、父 J.H.ワゴナー：ST[サイズ・オブ・ザ・タイムズ]編集長 at カリフォルニア)

「信仰による義」を明確に強調：義認は人の努力ではなく、キリストの義を信仰によって受け取ることだと説いた。

③オールド・ガード (守旧派、反対・慎重派、律法主義) → **律法＝礼典律**

・G.I. バトラー (George Ide Butler、当時の世界総会総理)

・U. スミス (Uriah Smith、RH[レジャー・アント・ヘラルド]編集長 at ミシガン)

礼拝・祭儀・犠牲制度に関する律法
イエス・キリストの十字架の犠牲で成就

バトラーやスミス (オールドガードの人たち) は、①②の主張に対して、「律法の軽視につながるのではない」「SDA の独自性が失われるのではない」と強い警戒感を抱いた。

▶会議は、神学的合意には至らず、ジョーンズやワゴナーに対して、多くの指導者が防御的・拒否的態度を示した (緊張と対立の中で終了し、表面的には「失敗」に見えた)。

▶エレン・G・ホワイトの立場

ガラテヤ書の律法について、私たちがキリストのもとに連れて行く養育係 (掛) は、どの律法かと私は尋ねられた。私は、礼典律と十戒の道徳律の両方であると答えた。・・・このガラテヤ書の中で、聖霊が使徒を通して述べているのは、特に道徳律についてである (R&H, 1958, P.233.234)。

エレン・ホワイトは後年、「1888 年は、私の生涯中、最も悲しい経験」「教会が大きな祝福を逃した時」、しかし同時に「神が教会に特別な光を与えた年」と評している (Letter 14, 1889 他)。

▶長期的影響等

1. SDA 神学の転換

「キリスト中心」「恵み中心」の神学が徐々に浸透、義認と聖化の正しい関係が整理されていった。律法は、救いの手段ではなく、キリストに導くものである。救いは、ただ信仰によって、ただキリストによってである。

2. 伝道・説教の変化

